

『今鏡』における「おはします」と「おはす」

川 岸 敬 子

はじめに

尊敬語「おはします」の敬度が「おはす」より高いのは言うまでもないが、使用対象にどのような違いがあるのだろうか。桜井光昭氏は『今昔物語集』^①について、「オハシマス」は「地の文（今昔物語三部を通じて）では、天皇から摂関・大臣級と仏神関係だけで敬度は非常に高い」^②、「オハス」は

地の文においては、用例わずかに八件^③で、国王・大臣・大納言・聖人・仏神が対象である。国王は天皇・震旦部の用例であるから、これをもって本朝両部の天皇にも用いられただろうとするには、まだ疑いが残る。用例に現われた限りの下限は大納言である。^④

としている。

『今昔物語集』は「一二世紀の初めごろ」成立、『今鏡』は「嘉応二年（一一七〇）成立」であり、『今鏡』がやや遅く、説話集と歴史物語の違いもあるが、同じ院政期に成立した作品ということ、比較するのも意味のあることと考える。そこで本稿では『今鏡本文及び総索引』の本文篇を用い、その地の文を調べることにした。『今鏡』の場合、ほぼ全体が老女の語りであるが、それは物語の地の文として読めるものと考ええる。なお、会話文の用例は「おはします」「おはす」各二三例（「おはしあふ」一例を含む）である。

「おはします」「おはす」は、その意味・用法から、「イル・アル」意のもの、「行ク・来ル」意のもの、補助動詞、の三種に分けられるので、以下それぞれについて見てゆく。

一 「イル・アル」意のもの

「イル・アル」意の「おはします」「おはす」の地の文における使用対象は次の通りである（数字は用例数）。

	おはします	おはす
帝・院・東宮	六五	三
后など	三五	一四
宮	二八	一三
皇族の親など	一	八
公とその家族 ⁽⁸⁾	四〇	四二

卿とその家族 ^③	○	四七
四位以下の者とその家族 ^④	○	二五
僧侶	○	二九
合計	一六九	一八一

地の文の「イル・アル」意の尊敬語としては、他に「ゐさせ給ふ」「三例、「いますがり」「おはせ給ふ」「ものし給ふ」「わたり給ふ」「ゐ給ふ」「めたてまつり給ふ」(二〇七—六) 各一例があるが、「おはします」「おはす」ほぼ専用と言える状況である。

右の表で、帝・院・東宮から公とその家族までは、「おはします」「おはす」が用いられるが、卿とその家族、四位以下の者とその家族には「おはす」のみが用いられている。「おはす」の下限は低い。なお、僧侶にも「おはす」のみが用いられている。

また、帝・院・東宮においては「おはします」が「おはす」の約二・三倍であり、圧倒的に「おはします」が多い。后などでは二・五倍、宮では約二・二倍と、ここでも「おはします」が優勢である。帝と皇族には、敬度の高い「おはします」を主に用いるということであろう。

注意すべき用例について見てゆこう。

帝に二例、東宮に一例「おはす」が用いられているが、

例一 いと心よき御けしきにて、堀川の帝の位にをはし、時、内へ参りて申せとて、(二四六—一〇)

の、帝の「をはしゝ」は、蓬左文庫本・前田本では「おはしましゝ」⁽¹⁾である。

例二 后の御姉にをはすれば、時々参り通ひ給につけつゝしのびて聞へ給事などもおはしけるなるべし。(二四一—
一五)

の、「しのびて聞へ給事などもおはしける」は男性の行為と考え、帝が左大臣有仁の北の方にとつた。「あまりなりける事」と、語り手が帝を批判的に見たことから「おはす」を使用したであろうか。

例三 その女御の御腹にみ子あまたをはしき。東宮と申、延久三年二月に生れ給て、(二三三—一五)

の「をはしき」の主語の「み子」には東宮が含まれるので、東宮の「おはす」とした。だが、あくまでもみ子(つまり宮)の「おはす」ととるべきものかもしれない。

以上のことから、帝・東宮の「おはす」は確例や通常の例とは言えない。

次に、后などの「おはします」三五例は、すべて后・中宮・女院・御息所に用いられているが、「おはす」一四例中六例は帝・院の寵愛を受けた人に用いられている。白河殿、廊の御方、宜陽殿である。「おはす」の敬度の低さに関係があらう。

例四 后、宮す所などかくれ給て、さるかた々もをはせざりしに、白河殿と聞ゑ給人をはしき。(二一六—一四)

例五 この人々の御いもうとに、廊の御方と申て、白河の院の御おぼえし給人おはせし。(二八六―二二)

次に、皇族の親などの「おはす」に帝の御乳母二例がある。

例六 この御門、御乳母は、修理大夫基隆の女、大藏卿師隆の女など、二三人ぞおはしけれど、(七九―五)

帝の御乳母に「おはします」は用いられない。

二 「行ク・来ル」意のもの

「行ク・来ル」意の「おはします」「おはす」の地の文における使用対象は、次の通りである。

	おはします		おはす	
帝・院	五		二	
后	〇		一	
皇族の親	一		一	
公	三		五	
卿	〇		一三	

四位以下の者	〇	五
僧侶	〇	三
合計	九	三〇

地の文の「行く・来ル」意の尊敬語としては、他に「わたらせ給ふ」一八例、「わたり給ふ」八例、「わたらる」一例がある。最高敬語は、「わたらせ給ふ」の方が「おはします」より優勢である。

右の表で、帝・院から公までは「おはします」「おはす」ほぼ両用であるが、卿、四位以下の者は「おはす」専用である。「おはす」の使用対象の下限が低い。なお、僧侶にも「おはす」のみが用いられている。

注意すべき用例について述べよう。

帝に「おはす」が二例あるが、うち一例は中国の帝である。⁽¹²⁾

例七 かの寺にをはして見給へりけるに、(一六―一七)〔高宗〕

また帝のもう一例は、

例八 はじめつ方は、上つねにをはし、夜昼遊ばせ給けるに、(一三六―八)

であるが、この箇所は蓬左文庫本・前田本では「おはしまして」⁽¹³⁾であるので、確例ではない。

後の「おはす」は女御（二七六一一三）に用いられたものであるので、あまり使用対象が高いわけではない。

三 補助動詞

補助動詞「おはします」「おはす」の地の文における使用対象は、次の通りである。なお、「(さ)せおはします」「二(七五―一)」は、対応する「(さ)せおはす」がないので、除外する。

	おはします	おはす
神仏	一	三
帝・院・東宮	一二二	二
后など	七二	一五
宮	三二	二五
皇族の親など	五	一九
公とその家族	七五	一三八
卿とその家族	〇	一三一
四位以下の者とその家族	〇	六五
僧侶	〇	四九
合計	三〇七	四四七

これらと同種の補助動詞の、地の文の尊敬語としては、他に「ゐさせ給ふ」二例、「ゐ給ふ」三例、「いますがり」一例、「ものし給ふ」二例があるが、「おはします」「おはす」ほぼ専用である。

右の表で、神仏、帝・院・東宮から公とその家族までは「おはします」「おはす」両用であるが、卿とその家族、四位以下の者とその家族は「おはす」専用である。「おはす」の使用対象の下限が低い。なお、僧侶も「おはす」専用である。

注意すべき用例について述べよう。

仏に「おはします」(二二〇—二三)、神に「おはす」が用いられているが、

例九 日吉の明神は、法花経を守り給神にをはす。(三四—一一)

は、蓬左文庫本では「おはします」⁽⁴⁾であるので、仏と神とで「おはします」「おはす」が使い分けられているとは言えない。

帝・院に「おはす」が各一例用いられている。

例一〇 あまりなりける事も侍けるやうに、これもをはしけるにや。(二四—一六)〔帝〕

例二と同様、帝について批判的に語っていることによる「おはす」であろうか。

例一 四十五六の御年のほどにやをはしけむ。(四六―四)〔院〕

この「をはし」は、蓬左文庫本では「おはしまし」⁽¹⁵⁾なので、確例ではない。

后などの「おはす」一五例のうちには、院の寵愛を受けた白河殿一例、播磨三例が含まれる。このような人々には「おはします」は用いられない。

例一二 その播磨とか聞えし人は、世に類なきさいわい人になむをはすめる。(一一九―五)

次に、皇族の親などの「おはす」に、白河殿のゆかり一例、帝の御乳母三例が含まれる。

例一三 かの白河殿とて、祇園にをはせしは、ゆかりまでさがたく、院にをぼしめされてをはせしに、(一一九―

一〇)

これらの人々に「おはします」は用いられない。

おわりに

以上、「おはします」「おはす」について調査した結果をまとめると、次の通りである。

- (一) 「おはします」は帝から摂関・大臣まで、「おはす」は四位以下の者まで用いられている。
- (二) 僧侶には「おはす」が用いられている。
- (三) (一)(二)は「イル・アル」意のもの、「行ク・来ル」意のもの、補助動詞、に共通している。
- (四) (一)(二)は、桜井光昭氏の調査された『今昔物語集』の状況と大差はないが、「おはす」の下限が『今鏡』の方が低い。老女の語りであることによるのか。同時代の他の作品を見ないと、判断は出来ない。
- (五) 帝・院・東宮の「おはす」は、諸本の異同があったり、語り手による帝への批判が考えられたりするのである。

- (六) 后などの「おはす」には、白河殿や廊の御方など、帝や院の寵愛を受けた人も含まれている。
- (七) 皇族の親などの「おはす」には、帝の御乳母、白河殿のゆかりが含まれている。
- (八) (五)(六)(七)は、(一)で認められる「おはす」の敬度の低さに関連付けられるものである。

注

- (1) 桜井光昭『今昔物語集の語法の研究』(明治書院 一九六六年)
- (2) 注(1)同書一一二頁。
- (3) 「同一説話内において、地の文では同一使用対象に対するもの(略)を一件とする」(注(1)同書三〇頁)。
- (4) 注(1)同書一一四頁。
- (5) 『日本語学研究事典』(明治書院 二〇〇七年)「今昔物語集」の項(佐藤武義氏執筆)。
- (6) 注(5)同書「今鏡」の項(遠藤好英氏執筆)。
- (7) 榎原邦彦・他編『今鏡本文及び総索引』(笠間書院 一九八四年)
- (8) 摂関と大臣。

- (9) 大・中納言、宰相、春宮大夫、上達部、三位、大將をここに入れた。
- (10) 少納言・中将・伯・刑部卿・民部卿・民部大輔・治部大輔・大藏卿・修理大夫・右兵衛督・兵衛佐・左衛門督・左衛門佐・木工頭・弁・四位侍従・(大)侍従・国司をここに入れた。
- (11) 海野泰男『今鏡全釈(上・下)』(福武書店 一九八二・一九八三年)(複製版 パルトス社 一九九六年)上五九六頁。
- (12) 中国の帝には「おはす」と決まっているわけではなく、「イル・アル」意では「おはします」(八八―)が用いられている。
- (13) 注(11)同書上五三三頁。
- (14) 注(11)同書上一二四頁。
- (15) 注(11)同書上一七九頁。